甚藏。　さう云はれると、おれも一言もねえ。あやまるから堪忍してくれ。まつたくおれが悪かつたのだ。おい、甚吉。おれがあやまつても堪忍してくれねえか。

甚吉。　賣り詞に買ひ詞で、おれも些とばかり忌なことを云つたが、親父をあやまらせたところで手柄にもならねえ。堪忍するも仕ねえもあるものか。

甚藏。　堪忍してくれるか。

甚吉。　堪忍するよ。そこで、仲直りにどうだえ。（猪口をさす。）　後生だから一杯受けてくんねえよ。

甚藏。　むゝ。（猪口をうけ取る。）

甚吉。　いゝかえ。つぐぜ。

（甚吉につがせて、甚藏は一口飲む。）

甚吉。　どうだえ。うまくねえかね。

甚藏。　うめえな。

甚吉。　うまけりやあ遠慮はねえ。もう先の長くねえからだだ。思ふさま飲むがいゝぢやあねえか。

甚藏。　先が長くねえだけに、たとひ五年でも三年でも、せめて生きてゐるあひだは眞人間らしく遣つて行きてえと思ふのだ。（猪口を飲みほして甚吉に戻す。）さあ、おれが酌をしてやる。

甚吉。　濟まねえな。（父につがせて飲む。）やつぱり江戸はありがてえ。旅へ出ちやあこんな酒は飲めねえからな。

甚藏。　手前どうしても旅へ出るのか。

甚吉。　好んで出てえこともねえが……。（さびしく笑ふ。）こんな首でも掛け換へがねえからな。

甚藏。　こんな首でも……。手前、首にかゝはるやうなことをしたか。

甚吉。　むゝ。ちつと暴つぽいことを遣つてしまつたのよ。

甚藏。　どこで何をした。

甚吉。　本所の二つ目で……。

甚藏。　をとゝひの晩か。

甚吉。　むゝ。

甚藏。　本所の往來で、懸取りに行つた吳服屋の手代を手拭で絞めたのか。

甚吉。　よく知つてゐるな。

時雨ふる夜

甚藏。おればかりぢやあねえ、世間でみんな知つてゐるあ。

甚吉。さうだらうな。

甚藏。だが、今まで手前とは知らなかつた。手前も度胸がよくなつたな。

甚吉。褒めてくれるのかえ。

甚藏。むゝ、褒めて遣つてもいゝ。おれの云ふことを肯けば褒めてやる。

甚吉。（かんがへて。）まあ、止さうよ。おめえに褒めて貰はねえ方が無事らしい。

甚藏。ほめられたくねえか。

甚吉。おめえに褒められると……。（笑ひながら首をたゝく。）これが飛んでしまはあ。（外を見て。）いゝ鹽梅に雨もやんだやうだ。ぢやあ、おめえも達者でゐねえよ。（手酌で一杯ぐつと飲む。）餘計な世話を燒くやうだが、好きな酒を急にやめるのは、からだの爲によくねえといふことだ。これからも寢酒の些とぐれえは飲む方がいゝぜ。いよ〳〵これでお別れだ。妹にも親孝行をしろと云つておくんなせえ。

（甚吉は德利と猪口を持ちて臺所へ行きかゝる。）

甚藏。おい、おい。

甚吉。（立つたまゝで。）なんだえ。

甚藏。もう一度坐つてくれ。話がある。

甚吉。（あざ笑ふやうに。）話は庚申の晩にしよう。おれは忙がしいからだだ。

（德利と猪口を臺所に置いて出ようとする。甚藏は追ひかけて引き戻して來る。）

甚吉。おい、おい。なにをするのだ。

甚藏。まあ、坐れといふに……。（無理に甚吉を坐らせる。）手前、どうしてもおれの云ふことを肯かれねえのか。

甚吉。又それをいふのか。今度はおれの方であやまるから堪忍してくんねえ。ぐづ〳〵してゐると夜が更ける。

（甚吉は起ちかゝるを、甚藏は又ひき戻す。）

甚藏。手前のやうな奴を出してやると、この上にも又どんなことを仕出來して、世間の人に難儀をかけるか判らねえ。おれが賴むから、おとなしく名乘つて出てくれ。

甚吉。おめえもくどい人だな。おれがどうしても忌だと云つたら何うするのだ。

甚藏。どうしても忌だといふなら……。もう仕方がねえ。おれが手前を引摺つて行つて、召連れ

時雨ふる夜

訴へをするからさう思へ。

甚吉。大方そんなことだらうと思つた。これだから善人はおそろしい。

（甚吉は甚藏を押退けて臺所から出て行かうとする。甚藏は又追ひかけて引戻して來る。）

甚吉。おい、もう好加減にしてくれねえか。うるせえな。

甚藏。野郎。どうしても肯かねえか。

甚吉。（むつとして。）知れたことよ。

（手あらく突き退くれば、甚藏は倒れる。）

甚吉。ざまあ見やがれ。

（甚吉は行きかゝる。甚藏は半纏をぬぎながら跳ね起きて甚吉を捉へ、その懐ろを探りて匕首を把り出す。）

甚吉。えゝ、なにをするのだ。（父の手を捉へる。）それはおれの商賣道具だ。

甚藏。こんな商賣道具を持つてゐるから、めつたに出しては遣られねえのだ。さあ、改心して自首するか。さもなけりやあ……。手前、もう生かして置かねえぞ。

甚吉。おめえに殺されるほどの耄碌はしねえ。詰まらねえ冗談は止めにして、そんなものはこつちへ返してくれ。

（甚吉は片肌ぬいで匕首を取返さうと爭ひ、甚藏は遂に匕首をぬいて斬付けるを、甚吉はかひくゞりて臺所へ逃げ込めば、甚藏は追ひかけてその襟髮を把つて引摺つて來る。甚吉も片手に臺所の出刃庖丁を持つてゐる。）

甚藏。さあ、素直に云ふことを肯くか。

甚吉。年寄の冷水も好い加減にしろ。業つく張りめ。

（甚藏は匕首、甚吉は出刃庖丁にて鬪ひ、甚吉は緣より片足踏みはづしてよろめく所を、甚藏は附け入つてその脇腹を突く。甚吉は緣に腰を落して倒れる。）

甚吉。畜生、たうとうおれを殺しやあがつたな。

（甚吉は起きんとして又倒れる。甚藏はぢつと眺めてゐる。うす月のひかり流れ入る。題目太鼓の音きこゆ。）

甚吉。（唸る。）水をくれ。

甚藏。むゝ、水をやる。待つてゐろ。

（甚藏は臺所より柄杓に水を汲んで來て、甚吉に飲ませてやる。）

時雨ふる夜

甚　藏。（悼ましげに。）甚吉。苦しいか。

（甚吉は答へず、唸るのみにて息絶ゆ。甚藏もその柄杓の水を飲みて、ほつと息。やがて甚吉の死骸を内へかき入れて、その枕もとへ屏風を逆さに立てまはし、佛壇より香爐をおろして來る。家のうしろよりおせん出づ。）

おせん。　なんだかどたばたしてゐたやうだが……。誰か喧嘩でもしたのかしら。

（甚藏は行燈を吹き消して奥に入る。）

おせん。　（臺所から覗く。）もし、誰もゐないんですかえ。今まで騒いでゐたのに、どうしたんだらう。

（おせんは内に入りて、月のひかりにそこらを眺める。）

おせん。　おや、大變に血がこぼれてゐる。（屏風のなかを覗いておどろく。）あ、大變だ、大變だ。

（おせんは狼狽へて下のかたへ駈けてゆく。奥より甚藏再び出で、線香に燈明の火をつけて香爐に立て、屏風にむかひて合掌して再び奥に入る。月の光はいよ〳〵流れ込む。やがて下のかたよりお房とおせんが走り出づ。）

おせん。　まあ、早く行つて御覽、大變だから。

お　房。　なにが大變なの。

おせん。　兄さんが殺されてゐるんだよ。

お　房。　え。

（ふたりは内に入り、お房は屏風の中をのぞいて叫ぶ。）

お　房。　あら、ほんたうに兄さんは血だらけになつて死んでゐる。それにしてもお父さんは何處へ行つたんだらう。（奥の障子をあけて又叫ぶ。）あ、をばさん、をばさん。

おせん。　（同じく覗いておどろく。）あら、お父さんは首をくゝつてゐるよ。

お　房。　お父さんは首をくゝつて……兄さんは殺されて……。一體どうしたんでせうねえ。

おせん。　わからないねえ。

（お房は泣き伏す。おせんは呆れて突つ立つてゐる。題目太鼓の音。）

――幕――

5
1

新宿夜話

大正十四年十一月作。
昭和二年五月。本郷座初演。

初演當時の主なる役割――齊藤甚五左衞門（市川左團次）齊藤大八（市川猿之助）信濃屋のお蝶（市川松蔦）若者千助（市川荒次郎）同く丑藏（市川段猿）旅籠屋の亭主（市川左升）旅籠屋の娘（市村家橘）在郷の客與次郎（市川八百藏）馬士（市川權十郎）六十六部（澤村源十郎）など。

登場人物――齋藤甚五左衞門。その弟大八。信濃屋の抱妓お蝶。信濃屋の若い者千助。おなじく丑藏。旅籠屋の亭主。旅籠屋の娘。在郷の客與次郎。馬士。六十六部。地廻りの若者。遊女屋の若い者。臺屋の若い者。烏追ひ。中間など。

（一）

江戸時代。明和の初年。

甲州街道。内藤新宿の宿はづれ。休み茶屋と安泊りを兼ねたる小さき二階家。すべて田舍びたる作りにて、軒には草鞋などを吊し、柱に「火なわあり」の札を貼り、店さきには駄菓子なども列べてあり。正面は鼠壁にて破れ障子の出入り口あり。軒には『御休所、御はたご』と記せる行燈をかけ、店の前には長床几二脚ほどを置き、影の痩せたる柳一本立つ。

（秋の日の暮れかゝる頃。老いたる旅僧は笠をかぶり、うしろ向きになりて床几に腰をかけてゐる。

亭主は店に坐りて爐の下を煽いでゐる。一方の床几には地廻りの若い者二人が腰をかけて烟草をのんでゐる。驛路の鈴、馬士唄きこゆ。下の方より六十六部が笈を背負ひて出づ。

六部。今歸りました。

亭主。（見かへる。）おゝ、歸りなすつたか。けふはお天氣で結構でしたな。

六部。けふは天氣がよいので、先づ牛込を振出しに、小石川、本郷、下谷、淺草、本所、深川をまはつて來たので、やれ、やれ、くたびれました。（草鞋をぬぐ。）

亭主。なるほどそれでは草臥れる筈だ。早く湯にでも行つて休みなさるがいゝ。

六部。はい、はい。さうしませう。

（六部は破れ障子をあけて奥に入る。）

若者甲。今聞いてゐりやあ、あの六部は牛込から、小石川、本郷、下谷、淺草、本所、深川をまはつて來たさうだ。それぢやあ江戸の半分をあるいてしまつたやうなものだぜ。

亭主。それもやつぱり信心の力でございますね。

若者乙。なにが信心なものか。ほんたうの信心なら辻堂の縁にでも轉がつて寢るのが當りめえだ。

若者甲。旅籠に泊つて湯に這入つて、寢酒の一杯も飲まうといふのぢやあ、信心もあんまり當てにやあならねえ。

若者乙。どうで山崎町の損料物よ。

亭主。（笑ふ。）はゝ、さうかも知れませんね。

（奥より六部が手拭を持つて出るに、亭主はあわてゝ口をつぐむ。）

六部。この草履を借りて行きますよ。

亭主。はい、はい。行つておいでなさい。

六部。日が暮れたら薄ら寒くなつて來た。どれ、ゆつくり溫まつて來ませう。

（六部は上のかたへ去る。下のかたにて太鼓入りの騒ぎ唄きこゆ。亭主は軒行燈に灯を入れる。）

亭主。おゝ、日が暮れたせゐか、大分世間が賑かになつて來ました。

若者甲。さあ、これからがおれ達の世界だ。

亭主。お樂みでございますね。

若者乙。樂みだか苦みだか知らねえが、かう病み付きになつちやあ仕方がねえ。

若者甲。なにしろ一廻りして來ようぜ。

亭主。早く顔をみせておいでなさい。

若者乙。なに、こつちが見に行くのさ。

甲乙。はゝゝゝゝ。

（二人は笑ひながら挨拶して下のかたへ去る。騒ぎ唄いよ〳〵賑かにきこゆ。）

亭主。（二人のあとを見送る。）はゝ、若い人はみんな面白さうだな。

老僧。（はじめて向き直る。）御亭主。

亭主。はい、はい。

老僧。江戸もよほど變つたやうだな。

亭主。江戸はお久振りでございますか。

老僧。江戸を立退いてから三四十年にもなる。

亭主。三四十年……。それでは江戸の變り方が又一としほお目に立つ筈でございます。

老僧。あの唄や太鼓はどこだな。

亭主。（笑ひながら。）この新宿でございます。

老僧。新宿……。（すこし考へる。）内藤新宿の茶屋旅籠屋は取潰しになつた筈だが……。

亭主。左様でございます。今から四十年ほど前に永代お取潰しといふことになりましたが、當春から再び御免になつたのでございます。

老僧。一旦お取潰しに相成つたものを四十年の後に再び御免……。どう云ふわけかな。

亭主。新宿お取潰しの後は、高井戸を馬繼ぎの宿に換へられたのでございますが、日本橋から高井戸までは三里半、なにぶんにも道中が長うございまして、馬や人足も難儀いたしますので、昨年から新宿再興の儀をねがひ出でまして、當春やう〳〵お許しになつたのでございます。こゝは日本橋から二里といふことになつて居りますから、やがて今までの半道で、道中の者はみな助かります。

老僧。それならば唯一通りの問屋場や旅籠屋だけを許されたら好さゝうなもの。飯盛の賣女までを許されて、あのやうに唄ひさわぐとは其意を得ぬことだな。

亭主。（又笑ふ。）御出家様から御覽になりましたら、定めて不思議にも思召しませうが、やはり斯ういふところにはあのやうな者がございませんと、宿が繁昌いたしません。五街道のうちでも甲州街道は一番さびしいところで、新宿が取潰しの後はまるで草原同樣になつて居りましたが、それが御免になりますと急に夜が明けたやうになりまして、御覽の通りの繁昌で土地の者もみな喜んで居ります。

老僧。茶屋旅籠屋に賣女を置いて、往來の旅人に色を賣らせねば、この土地が繁昌せぬといふのか。

亭主。から申しては如何でございますが……。（頭をかく。）兎かく世間は色と酒で、どうも致方がないやうでございます。こゝに色町が新しく出來ましたので、往來の旅人ばかりではございません。山の手一圓のお武家も町人もみな珍しがつて通つてまゐります。はゝゝゝゝ。

老僧。（聞き咎めるやうに。）武家も通つてまゐるか。

亭主。隨分通つておいでのやうでございます。今から四十年前と申しますと、わたくし共がまだ子供の時分のことで、くはしい事はよく存じませんが、この新宿が一旦お取潰しになりましたのは、やはり其のお武家の一件からださうでございます。

老僧。さうかな。

亭主。四谷の大番町に齋藤甚五左衛門といふ四百石取りのお旗本がございまして、その弟がこの新宿で喧嘩をしたとか云ふのが本で、甚五左衛門といふ人は大層立腹して、すぐにその弟に腹を切らせて、その首を大目付のお役人のところへ持つて行つて、自分の屋敷は潰されてもいゝから、相手の新宿を取潰してくれろと願つて出たさうでございます。

老僧。（ひとり言のやうに。）それで新宿は潰された。

亭主。甚五左衛門といふ人の屋敷も潰されました。

老僧。それが三十年四十年の後には此の通りに再興して、畫にまさる繁昌になつた。して、その甚五左衛門の屋敷はどうなつたな。

亭主。それはお取潰しになつたまゝで、屋敷のあとは今でも空地の草原になつて居ります。

老僧。屋敷あとは草原になつてゐるか。

亭主。お武家の屋敷に草は生えても、色町に草は生えません。（笑ふ。）不思議なものでございますよ。

（老僧は默つてかんがへてゐる。騷ぎ唄又きこゆ。）

亭主。（こゝろ付いたやうに。）いや、飛んだおしやべりを致しました。さつきはお泊りになるやうなお話でございましたが、どうなさいますな。

老僧。どうしようか。（考へる。）小石川の緣者をたづねようと思つてゐるのだが、こゝから小石川の果まではよほどの路程がある。久振りでたづねてゆくのに、夜ふけて門をたゝくのも氣

の毒、殊にわしも疲れてゐる。やはり今夜は厄介にならうか。

亭主。ありがたうございます。（奥にむかひて。）おい、おい、おきよ。

娘。はい、はい。

（奥より娘出づ。）

亭主。このお客様を裏の井戸端へ御案内して、おすゝぎを取つてあげろ。

娘。（僧に。）どうぞこちらへお廻り下さいまし。

（娘は老僧を案内して、下のかたより家のうしろへ連れてゆく。騒ぎ唄絶えずきこゆ。上の方より六部はぬれ手拭をさげて出づ。）

亭主。大層お早うございましたね。

六部。大變にこんでゐるので、早々にあがつて來ました。

亭主。あかりのつく時分はいつも込み合つて困りますよ。それに此頃はこゝらに町家が殖えたので、なほ〳〵混雑いたします。

六部。まつたく新しい家が澤山出來ましたね。

亭主。いや、もう、一日増しに新しい家が出來まして、こんな古い家はわたくしの店ぐらゐでございますよ。

六部。おまへさんの店もこれからは繁昌しませうね。

亭主。どうかさうしたいものでございます。

六部。わたしも夜食をしまつたら、こゝらの店の繁昌を見物して來ませう。

亭主。では、お歸りにはなりませんか。

六部。（笑ふ。）とんだ事を……。そんなことをしたら、佛様の御罰があたります。

亭主。はゝゝゝゝゝ。

（六部は奥に入る。太鼓の音いよ〳〵高くきこゆ。）

亭主。いよ〳〵世間が賑かになつて來た。これでは若い人たちの浮かれ出すのも無理はないな。

（亭主は笑ひながら店に入る。舞臺暗轉。）

（二）

（新宿、信濃屋の店さき。少しく上のかたによせて入口、信濃屋と染めたる暖簾を下げてあり。左右は千本格子にて、下の方には用水桶を積んであり。正月のはじめにて店さきには松飾りを立て、

店のうちには灯をともしてあり。

（舞臺明るくなると、太鼓入りの騒ぎ唄賑かにきこゆ。そめきの男數人出で、左右にすれ違ひて去る。登場の人物は第一場より四十年前、享保時代の風俗と知るべし。下のかたより齋藤大八出づ。大八は四百石の旗本の次男、廿歳前後、放蕩無頼の若者にて酒に醉つてゐる。上のかたより又もやそめきの男三人出で、すれ違ふときに一人が大八に突きあたる。）

大八。　やい、待て、待て。なんでおれに突き當つた。

男。　へい、へい。粗相ですから何うぞ御勘辨をねがひます。

大八。　たゞ御勘辨で濟むと思ふか。詫びるなら詫びるやうに、土下座をして手をついてあやまれ。

男。　それが忌なら相手になれ。片つ端から叩つ斬るぞ。

大八。　（よんどころなく。）へい、へい。（土に手をついてあやまる。）眞平御免下さいまし。貴様ばかりでは勘辨出來ねえ。連れの奴等もかゝり合だぞ。みんな一緒にあやまれ、あやまれ。えゝ、犬つくばひになつて詫びろと云ふのに……。

男二人。　（額をみあはせて。）へい、へい。

（連れの男二人もおなじく、土に手をついて頭を下げる。）

大八。　これからは氣をつけろ。

男三人。　へい、へい。（早々に下のかたへ逃げてゆく。）

大八。　（笑ふ。）あんな奴等ぢやあ喧嘩をする張合もねえ。もう些と面白い相手は來ねえかな。

（大八はあたりを見まはしてゐる。上のかたより臺屋の若い者が臺の物をかついで出づ。大八はつかつかと進み寄つて突きあたる。臺の物は地面に散亂する。）

臺屋。　えゝ、なにをしやあがる。明盲め。

大八。　なんだ。（臺屋の胸ぐらを把る。）もう一度云つてみろ。貴様の方から突き當つて置きながら、武士に對してあき盲とはなんのことだ。

臺屋。　（すかし視る。）やあ、大番町の若殿様でございましたか。

大八。　この新宿から四谷へかけて、おれ様の面を知らねえものは流しの按摩ぐらゐのもので、大宗寺の閻魔でも精塚のばゝあでも、向うから挨拶をする齋藤の大八様を知らねえか。貴様こそよつぽどの明盲だ。さあ、なんでおれに突き當つた。

臺屋。　（惡い奴に逢つたといふ風で。）へゝ、それがついお見それ申しまして、飛んだ失禮を申し上げました。まつぴら御免下さいまし。

大八。唯では料簡ならねえ。あやまるならばあやまるやうに、おれの股の下をくゞつて行け。

臺屋。途方もねえことを云やあがる。

大八。なんだ。（刀に手をかける。）

臺屋。へい、へい。仰せに從ひます。

（大八は立ちはだかり、臺屋は股の下を這ひくゞる。）

大八。ざまあ見やがれ。

臺屋。へい、へい。恐れ入りました。

（臺屋は落ちたる臺の物を拾ひあつめて、早々に下のかたへ逃げてゆく。）

大八。はゝゝゝ。だん〳〵面白くなつて來たぞ。

（大八は上の方へゆきかゝると、格子のうちより信濃屋の抱妓お蝶が聲をかける。）

お蝶。ちよいと、大の字。

大八。（見かへる。）なんだ。

お蝶。こゝまでおいでよ。

大八。なに、こゝまでおいで……。おらあ甘酒は飲みたかあねえ。

お蝶。惡く酒落ないで早くおいでよ。

大八。よし、よし。（格子の前に來る。）そこで、なんの用だ。幾らかお年玉でも呉れようといふのか。

お蝶。品の惡いことをお云ひでないよ。御人體が廢るぢやないか。

大八。御人體は今年の暮から廢つてゐらあ。大晦日に夜逃げをしねえのが見つけものよ。

お蝶。かんがへてみると、よくお互ひに年が越せたものさ。

大八。正月早々から溜息をつくこともねえ。まあ、せい〳〵稼いでくれ。松が取れたらお客樣で來るよ。（ゆきかゝる。）

お蝶。ちよいと、ちよいと、お前さん。

大八。うるせえな。

お蝶。後生だから喧嘩はよしてお呉れよ。

大八。この元日から料簡を入れかへて、喧嘩なんぞは一切お廢止だ。

お蝶。嘘をおつきよ。今もそこで喧嘩をしてゐたぢやあないか。

大八。あれは喧嘩といふものぢやあねえ。向うから突き當つて來たから、無禮咎めをしただけの

ことだ。

お蝶。それでも相手に土下座をさせたり、股をくゞらせたり、飛んだ助六だよ。

大八。こゝらはおれの縄張内だ。助六をきめるに不思議があるものか。唯しやべつてゐるばかりが能ぢやあねえ。この助六に一服吸ひつけてくれ。

お蝶。お正月で忙がしいんだよ。お前さんなんぞに構つてゐられるものか。いつまでうろ〳〵してゐると、碌なことは仕出來さないから、風吹き鴉も好い加減にして早くお歸りよ。

大八。辻番のおやぢぢやあるめえし、今からぼんやりと屋敷へ歸つて、安火の猫をかゝへてゐられるか。これから宿中を一とまはりして、そこらで春らしく一杯飲んで……。

お蝶。勘定がなくつて……馬を曳いて……。屋敷へ歸つて……兄さんに叱られて……。

大八。べらぼうめ。そんな不景氣なんぢやねえや。おゝ、寒い。手前のやうな風の神と話をしてゐると、こつちが風邪を引かあ。

（大八はゆきかゝる。）

お蝶。ぢやあ、おとなしくお歸りよ。

大八。餘計な世話を燒くな。おれの足でおれが勝手にあるくのだ。

お蝶。ちよいと、お前さん。

大八。又呼ぶのか。

お蝶。巡禮に御報謝だよ。

（お蝶は格子のあひだから二朱銀をつゝみたる紙をひねつて投げ出す。大八は拾つて明けてみる。）

大八。やつぱりお年玉か。これはお忝け、濟まねえな。

（大八はその銀を懐中して上のかたへ立去る。お蝶は格子のあひだから見送る。暖簾のうちより店の若い者千助出で、舌打ちをしながら大八のあとを見送る。鳥追ひの女が三味線をかゝへて行き過ぎる。）

千助。（お蝶に。）もし、お蝶さん。店はみんな上つてゐるのに、お前さんはそこに何をしてゐなさるのだ。

お蝶。なじみの人が來たから話してゐたのさ。

千助。なじみにも因るが、あゝいふ悪いのは寄せねえがいゝね。わたしもさつきから出ようと思つてゐたが、相手が悪いから控へてゐたのだ。旗本の次三男には兎かく良くねえのが多いものだが、あの齋藤の次男と來ては悪い方でも粒選りで、酒は飲む、博奕は打つ、喧嘩は

する。まつたく箸にも棒にもかゝらねえ代物だ。あんな奴にかゝり合つてゐると、おまへさんの爲にもならず、こゝの店の商賣の邪魔にもなる。好い加減に見切りをつけて、お穿き物にしてしまふ方がよからうぜ。

お蝶。（むつとして。）御深切にありがたう。いづれ春永にゆつくり考へませうよ。（云ひすてゝ奥に入る。）

千助。へん、ふくれつ面をして行きやあがつた。

丑藏。（暖簾の内より同じく若い者丑藏出づ。）

（笑ふ。）おめえが折角の諫言も暖簾に腕押しといふ形だね。

千助。お蝶は年も若し、容貌もよし、宿場には惜しいほどの上玉だが、蓼食ふ蟲も好きぐ〜で、とんだ悪足が出來たものだ。

丑藏。相手が屋敷者だけに始末が悪いね。

千助。町人なら疾うにお穿きものだが、二本指しだから我慢をしてゐるのだ。

（この時、上のかたにて喧嘩だ喧嘩だと呶鳴る。）

丑藏。なに、喧嘩だ。

千助。どうも仕方がねえ。これも松の内のお景物だが、あんまり大事にしたくねえものだ。

（上のかたより大八は髪もみだれ、衣紋もみだれ、鳥追ひの三味線をふりまはして、地まはりの男ふたりと闘ひながら出づ。あとより地まはりの男一人は大八の大小を持つて出づ。）

男一。さあ、大小を取上げてしまへば大丈夫だ。

男二。思ひ切つて、なぐれ、なぐれ。

大八。なんの、貴様達に負けてたまるものか。

（三人は店先へ來て叩き合ふ。鳥追ひの女も出て來りてうろ〜してゐる。）

千助。（丑藏と眼をみあはせる。）これ、これ、どうしたのだ。こゝの店の前で喧嘩をされては迷惑だ。

丑藏。まあ、まあ、おとなしくするがいゝぜ。

（千助と丑藏は仲裁する振をして、地まはりと一緒に大八をなぐる。）

大八。えゝ、醉つてゐなければ貴様たちの五人や三人、片つ端から踏み殺してやるのだ。さあ、おれの大小をわたせ、刀を返せ。

男三。これを渡してたまるものか。

千助。　まあ、待ちなせえと云ふのに……。

大八。　なにを云やあがるのだ。

（大八はあばれる。大小を持つたる男はあとに退りて見物し、千助、丑藏と男ふたりは無理無體に大八の三味線を取りあげて捻ぢ倒せば、鳥追ひは落ちたる三味線を拾ひて早々に逃げてゆく。暖簾の内よりお蝶は跣足にて走り出づ。）

お蝶。　あら、どうしたのよ。まあ、待つて下さいよ。

男一。　屋敷者だと思つて、よけて通せば際限がねえ。

男二。　なんぼ何でも、もう料簡は出來ねえのだ。

お蝶。　また喧嘩をしたのかえ。あれほど云ふのに肯かないからこんな事にもなるのさ。みんなも後生だから堪忍して下さいよ。

大八。　こいつ等にあやまることがあるものか。おれは大番町の齋藤大八だ。武士に無禮狼藉を働いて後悔するな。さあ、大小をわたせ。

お蝶。　お前ももうおよしなさいよ。多勢に無勢で、お前ひとりが幾ら威張つたつて敵やあしないよ。怪我でもするといけないからさ。

大八。　なに敵はねえことがあるものか。こんな端下人足が束になつて來ても知れたものだ。

（大八は取られし腕をふり拂つて又起きあがる。お蝶は捨臺詞にて止める。大八はお蝶を突き倒して、大小を取返しに行かうとするを、男二人は遮る。千助は大小を持つたる男に向つて、早く逃げてしまへといふ。男は大小をかゝへたまゝで上のかたへ逃げ去る。大八は追はうとするを、男二人は又遮る。お蝶はうろ〳〵してゐる。このあひだに、左右より近所の店の若い者五六人と地廻り七八人出づ。）

一同。　（口々に。）なんだ。なんだ。

千助。　喧嘩だ、喧嘩だ。

丑藏。　相手は大番町の大八だ。

一同。　むゝ、あの病犬か。なぐれ、なぐれ。

（一同は地廻りに加勢して大八に打つてかゝる。お蝶は支へようとするを、千助と丑藏は無理におさへて暖簾の内へ引摺り込む。そのうちに大八は大勢を相手にあばれ疲れて倒れる。）

男一。　こんな暴れ者は痛め付けてやるのが世間の爲だ。

男二。　これに懲りて武士風を吹かすな。

（大勢ばわや〳〵云ひながら大八を踏みつけ、打ち据ゑる。暖簾の内よりお蝶は又かけ出すを、手助丑蔵はひき戻す。この騒ぎの最中に、上のかたより齋藤甚五左衛門、廿五六歳、四百石の旗本、年禮の戻りの體にて社衿を着し、中間ふたりを供に連れて出づ。中間の一人は提灯を持つ。）

中間一。　往來の邪魔だ。退け、退け。

（これにて大勢も少しく鎭まる。）

甚五左。　屠蘇機嫌とは申しながら路のまん中で立騒ぐな。こゝは天下の往來だぞ。

（云ひすてゝ下の方へ行き過ぎようとする。その聲を聞きつけて、倒れたる大八は聲をかける。）

大　八。　兄上ではございませんか。

甚五左。　なに……。（見かへる。）

大　八。　大八でございます。

（中間の一人は提灯を差付ける。）

中間一。　おゝ、大八様だ。

中間二。　やれ、やれ、これはどうしたのでございます。

甚五左。　大八。（進みよる。）その見苦しい體たらくは何としたのだ。

（これを聞いて、一同は顔をみあはせて囁き合ひ、一度にばら〳〵と逃げてゆく。甚五左衛門はそのうしろ影を見送る。）

甚五左。　町人共がばら〳〵と四方に逃げ散る。（怒りの聲をふるはせて。）これ、大八。貴様は彼等に打擲されたのか。

（土に手をつく。）面目次第もございません。

（聲するどく。）大小はどうした。

（大八はだまつてゐる。）

甚五左。　これ、腰の物は如何いたした。

大　八。　殘念ながら奪ひ取られました。

甚五左。　なに、大小をうばひ取られた。町人どもに大小を……。（吃となつて。）その仔細をいへ。

大　八。　恐れ入りましてございます。

甚五左。　恐れ入つたとばかりでは判らぬ。武士が大小を奪はれて、かやうな體たらくに相成るには、よく〳〵の仔細が無くてはならぬ筈だ。隱さずに云へ。しかと申せ。

大　八。　はあ。（うつむいてゐる。）

（この時、千助と丑藏は暖簾のうちより顔を出して窺ふ。甚五左衞門は左右を見かへりて二人に眼をつける。）

甚五左。　これ、これ。

千　助。　はい、はい。（丑藏と共に暖簾を出る。）

甚五左。　この店さきで起つたことであれば、おまへ達も存じて居らう。この大八はどうしたのだ。

千　助。　（迷惑ながら。）はい。あの……。

甚五左。　早く申せ。

千　助。　實は其、喧嘩をなされたのでございます。

甚五左。　喧嘩をいたしたのか。相手は何者だ。

千　助。　（丑藏と顔をみあはせる。）それはわかりません。

甚五左。　大八。おまへも知らぬか。

大　八。　大抵は知れて居ります。こゝらの宿屋の男共や、こゝらを遊びあるく町人共でございます。何分にも醉つて居ります上に、相手は大勢、不意に大小をうばひ取られまして、かやうな恥辱を受けたのでございます。

甚五左。　（千助をみかへる。）しかと左樣か。

千　助。　（しりごみする。）いえ、わたくし共は仲裁に出ましたばかりで……。

丑　藏。　決して手出しなどを致した覺えはございません。それは大八樣がよく御存じの筈でございます。

甚五左。　おまへ達は兎も角も、この大八を打擲いたしたのは、宿屋の者共とこゝらを遊びあるく町人共……。それに相違ないな。

千　助。　（いよ〳〵迷惑して。）そんなことかも知れません。

甚五左。　まさかの時にはおまへ達が證人だぞ。

千　助。　え。

丑　藏。　（中間に。）それ、二人を取逃すな。

甚五左。　（千助と丑藏はおどろいて逃げんとするを、中間二人はかけ寄つて取押へる。）

大　八。　大八。起て。

甚五左。　はあ。（起たうとして又倒れる。）

大　八。　えゝ、弱い奴め。起て、起て。

甚五左。（甚五左衛門は手を取つて引立てると、大八は起ちかゝりて又倒れる。）

大　八。（思案して。）その體では所詮屋敷まで歩いては戻られまい。駕籠にのせて歸るほどならば、死骸にして連れてゆく。大八、こゝで腹を切れ。

甚五左。はあ。

大　八。場所もあらうに、かやうな惡所場に於て、武士たるものが大小をうばはれ、足腰も立たぬやうに打擲され、よもや生きてはゐられまい。せめてもの情に、屋敷へ連れ歸つて、疊の上で切腹させて遣らうと存じたが、その體では迚もかなはぬ。兄が介錯してやるからこで死ね。

甚五左。はあ。

大　八。これ、よく聞け。おれもひとりの弟を殺す以上、唯そのまゝには濟まされぬ。其方の首を持參して、大目付松平圖書頭殿へとゞけ出で、齋藤甚五左衛門の知行は上へ差上げ申し候ふ間、その代りに内藤新宿は永代御取潰しを願ふと申立てるぞ。

（千助、丑藏、中間等もおどろく。）

兄上。それでは餘りに恐れ入ります。わたくし故にお家をほろぼしましては……。

甚五左。いや、かまはぬ。その方の不埒は重々だが、所詮喧嘩は兩成敗、これほどの恥辱をあたへられて、命までもほろぼすからは、相手の新宿も取潰さねば置かぬぞ。甚五左衛門は先祖代々の家を捨て、四百石の知行をなげ出して、屹と訴訟の趣意をつらぬいてみせる。それをみやげに潔よく死ね。（あたりを睨んで。）この新宿が取潰されて、やがて一面の草原となるのを冥途から見物しろ。

大　八。はあ。この上はなんにも申しませぬ。こゝで尋常に切腹つかまつります。最期の際に水が一口飲みたうございますが……。

甚五左。よし、よし、聞きとゞけた。（店の方にむかひて。）これ、誰か水を持つてまゐれ。

千　助。では、わたくしが……。

中間一。えゝ、貴樣は逃げるな。

甚五左。（かさねて呼ぶ。）これ、早くせぬか。水を持つてまゐれ。

（暖簾の内よりお蝶は茶碗を盆にのせて持つて出づ。）

甚五左。おゝ、水を汲んで來たか。（茶碗を取らうとする。）

お　蝶。いえ、あの、これはわたくしから……。

甚五左。　（お蝶は大八のそばへ行きて茶碗をわたせば、大八は顫へる手に受取りて飲む。お蝶は無言で眼をふいてゐる。大八飲み終れば、甚五左衛門は小刀を鞘ぐるめに拔いて大八に渡してやる。）

大　八。　武士たる者が人の刀を借りて切腹する。かへすぐ〳〵も不覺者め。（叱る。）

甚五左。　一言の申譯もございません。恐れながら御介錯を……。

大　八。　承知いたした。

甚五左。　（甚五左衛門は肩衣をはね退けて刀をぬく。大八も肌をくつろげて小刀を腹に突き立てる。お蝶は泣きながら手をあはせる。千助と丑藏はふるへてゐる。）

兄上……。

むゝ。（介錯して。）駕籠をよべ。

（鉾豪喧轉。）

（二）

もとの安泊りの店さき。第一場とおなじ夜、太鼓入りの騒ぎ唄きこゆ。

（娘は店に坐つてゐる。店さきに在郷の客與次郎立つ。馬士は馬をひきながら與次郎と爭つてゐる。）

與次郎。　これ、馬鹿も休み休み云へ。高井戸からこゝまで一里半のところを五百文も取られてたまるものか。

馬　士。　これが當り前の旅の人なら、二百文が百文でも乘せて來るが、おまへさんは一體どこへ行くだね。

與次郎。　どこへ行かうとおらが勝手だ。足下を見てねだり言をいふな。途方もねえ野郎だ。

馬　士。　なにが途方もねえことがあるものか。おまへは今夜これからどこへ行くだよ。

與次郎。　うるせえ奴だな。宿までの戻り馬だから、幾らでもいゝから乘つてくれろと、われの方から頼んだでねえか。

馬　士。　そりやあ商賣だから頼みもしたが、馬士に酒手はお定まりだ。ましておまへはどこへ行くだよ。（與次郎の袂をつかんで引く。）

與次郎。　（振拂つて。）えゝ、執拗い野郎だぞ。どこへ行かうとおらが勝手だといふに……。

馬　士。　（笑ふ。）それ、見ろ。行く先は云はれめえ。おらが方でもそれを察してゐるから、あたり前よりも餘分の酒手を貰ひてえといふのだ。馬士をいぢめて、自分ばかり面白いことをしようと云ふのは、第一に冥利がよくねえぞ。はゝ、さうでねえか。はゝゝゝゝ。

與次郎。　幾度云つても同じことだ。それ、こゝに百五十文ある。それで悪ければ勝手にしろ。

（與次郎は店さきの床几の上に鐚をおいて下の方へゆきかゝるを、馬士は手綱を放して追つてゆく）

馬士。　これ、いけねえと云ふのに……。女郎買ひに行く客を百や二百で乗せて堪るものか。大抵世間の相場といふものがあるものだ。

與次郎。　世間のことはおらあ自分のきめただけを拂へばいゝのだ。

馬士。　そつちで決めても、おらが不承知だよ。

與次郎。　それをおらが知つたことか。このもゝんがあめ。（行きかゝる。）

馬士。　なにがもゝんがあだ。（ひき戻す。）文句をいふなら拂ふだけの物を拂つてから云へ。このむじな野郎め。

與次郎。　こいつもう料簡しねえぞ。

馬士。　おらが方でも料簡しねえだ。

（二人はなぐり合ひをはじめる。娘はおどろいて起ちあがる。）

娘。　あれ、お父さん。大變よ。喧嘩ですよ。

（奥より亭主出づ。）

亭主。　なに、喧嘩だ。どうもいけないな。（表へ出る。）これ、これ、喧嘩は止めだ、止めだ。（二人のあひだに割つて入る。）

馬士。　だつて、お前。このむじな野郎が……。

亭主。　まあ、いゝ。まあ、いゝ。そつちのお客もまあ料簡しなさるがいゝ。おらが方から好んで喧嘩の種を播いたわけでねえ。この馬士めが足もとを見てゆするからのことだ。

馬士。　なに、ゆすりだ。

亭主。　はて、いゝと云ふのに……。どこの里でも喧嘩は禁物だが、この新宿では取分けて大禁物だ。四十年前にこの宿場がお取潰しになつたのも、元の起りは喧嘩からだ。

馬士。　むゝ。さうだ、さうだ。

亭主。　折角御免になつて再興したところへ、又ぞろ喧嘩をおつぱじめて何うするのだ。なにかの間違ひの出來た暁には、おまへ等もおれ達も共難儀ではないか。

馬士。　むゝ。さうだ、さうだ。

亭主。　この宿が又つぶされたら、おまへさん達も遊び場所に困るだらう。

與次郎。　むゝ。さうだ、さうだ。

亭主。　さうしてみれば、おたがひに喧嘩口論をつゝしみ、土地の繁昌を計るのが當りまへだ。さあ、その理窟が判つたら、悪いことは云はないから、どつちも笑つて別れることにしなさい。どうだ、どうだ。

馬士。　(笑ふ。)いや、わかつた、判つた。

與次郎。　(笑ふ。)わかりました。ぢやあ、馬士どん。云ひ分はないね。仲直りのしるしにもう廿文置くよ。

馬士。　はい、はい。有難うございました。

亭主。　それでは、めでたくめて、しやん〳〵〳〵。

三人。　(笑ひながら手を打つ。)はゝゝゝゝゝ。

與次郎。　(亭主に。)どうも御厄介をかけました。

亭主。　どうぞ明朝お寄りください。

(與次郎は挨拶して下のかたへ立去る。馬士は床几の上の錢を取る。)

馬士。　まあ、これで家へ歸つて寢酒でも飲むか。

亭主。　それがいゝ。醉つ拂つてかみさんと喧嘩をする分には、どんな摑み合をしても構はないからな。

馬士。　なに、おらが嬶は亭主孝行だから、めつたに喧嘩なんぞすることぢやあねえだ。はゝゝゝゝ。

(馬士は馬を牽いて上のかたへ立去る。)

娘。　お父さん。早く仲直りになつて好かつたねえ。

亭主。　まつたく喧嘩には懲々だ。

(下のかたより六部出づ。)

六部。　一とまはりして來ました。

亭主。　はゝ、隨分賑かでしたらうね。

六部。　どこの二階でも三味線や太鼓で賑かいにはおどろきました。

亭主。　年を取つた人たちの話を聞くと、四十年前の宿よりもずつと繁昌ださうでございますよ。なにしろ毎晩あの通りのドンチヤン騒ぎですからね。はゝ、まあお掛けなさい。(娘に。)これ、お茶をあげろよ。

娘。　あい、あい。

（六部は店さきに腰をかける。娘は茶を持つて來る。）

六部。　もう何時でせうね。

亭主。　さあ、まだ四つにはなりますまいが、夜風が大分ひや〳〵して來ました。もう秋も末でご

ざいますからね。

六部。　併しこゝらは霜枯れ知らずといふ景氣で結構ですよ。

（奥より老僧出づ。）

亭主。　御出家樣、これから何處へかお出かけでございますか。

老僧。　泊めて貰はうと思つたが、どうも今夜は寢られさうもない。やはりこれから小石川まで行

くとしよう。

亭主。　これから小石川まで……。（やゝ意外らしく。）夜なかになつてしまひませう。

老僧。　いや、夜道には馴れてゐる。（紙につゝみし錢を出す。）輕少だが、宿賃と茶代に取つて置い

てくれ。

亭主。　はい、はい。ありがたうございます。では、どうしてもお出かけでございますか。

老僧。　あの笛太鼓を聞きながら、こゝでおち〳〵とは眠られまい。どうも修行が足らぬとみえる。

亭主。　（笑ひながら。）はい。

老僧。　思ひ切つて出かけるから、草鞋を出して貰ひたい。

娘。　はい、はい。

（娘は手傳ひて、僧に草鞋をはかせる。騷ぎ唄は、又一としきり賑かにきこゆ。）

六部。　おゝ、囃すわ。囃すわ。御出家樣の逃げて行かれるも無理はない。わたしも今夜は浮かさ

れて、寢られないかも知れないぞ。（笑ふ。）

（老僧は無言にて、杖と笠とを持ちて下のかたへ行きかゝる。）

娘。　どうも有難うございました。

亭主。　氣をつけておいでなさい。

（下のかたより第一場の地廻り二人、酒に醉ひて唄ひながら出づ。老僧はそれと摺れちがひながら

行きかけて下のかたを見かへり、やがて笠をかぶりて歩み去る。騷ぎ唄賑かにきこゆ。）

――幕――

52
16

綺堂戲曲集（第十二卷）終

綺堂脚本集第十二卷
（定價金貳圓參拾錢）

昭和二年十二月二十六日印刷
昭和二年十二月二十九日發行

著作者　岡本敬二
東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地

發行者　和田利彦
東京市小石川區諏訪町五十六番地

印刷者　堀江關武
東京市小石川區諏訪町五十六番地

印刷所　常磐印刷所

著作者檢印

發行所　東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
（電話京橋六五二一・四四一五）
（振替口座東京一六一七）
春陽堂

52
16

二 1971
元

527
16